

「全国ムスリムミーティング」

申請者:政策・メディア研究科博士課程 3 年 戸田圭祐

指導教員:総合政策学部教授 奥田 敦

1. 目的

本活動は、国内の主要なモスクの代表者を招き、各モスクのコミュニティが抱える日本での共生上の課題とその解決に向けた方向性について議論し、最終的にその成果を何らかの形で日本社会に向けて発信することを目的とする。ディスカッションのテーマとしてはハラール食品やムスリム観光客への「おもてなし」、ムスリム 2 世・3 世に対する教育、地域社会との付き合い方などである。こうした問題の解決を進めていくことで、最終的に本活動が、イスラーム教徒と非信者との共生モデルの構築に寄与できればと考えている。

2. 実施概要

・日時:8 月 8 日(土)13:30-18:30

・場所:慶應義塾大学三田キャンパス 421 号教室

・登壇者:モスク関係者 7 名と奥田敦教授(その他にオブザーバーが 7 名、SFC 研究所イスラーム研究・ラボ所属研究員と奥田敦研究会所属学生が参加。詳細は別紙参照)

3. 当日のプログラム

<第1部>

13:30 開会

13:35 基調講演「現代日本社会における「共生モデル」構築へ向けて」(総合政策学部教授 奥田 敦)

14:05 登壇者による報告「ムスリムコミュニティが抱える「共生」上の課題について」

15:30 休憩(アスル礼拝)

<第2部>

15:50 ディスカッション(ハラール食品とムスリム観光客への「おもてなし」・ムスリム 2 世、3 世に対する教育・地域社会との付き合い方など)

17:30 休憩

<第3部>

17:45 今後の方向性についての議論のまとめ

18:25 閉会の挨拶(総合政策学部教授 奥田 敦)

18:30 閉会

4. 成果報告

神奈川県で大学発政策提案制度「ムスリム接遇人材育成プログラムの開発と実施」の活動の一環として、全国ムスリムミーティングを今回はじめて実施したが、各登壇者の報告に基づき、テーマごとにそれぞれ有意義な議論を行うことができた。議論を通じ、各論点が明確化されただけでなく、日本のイスラーム教徒たちが今後一緒にアクションをおこしていくうえでの共通の基盤のようなものを形作ることができたように思われる。

まず議論全体として話にでたのは、人間としてのつながりや、アッラーの完全性と人間の不完全性を区別する

ことの大切さ、そしてイスラームの教えのレベルに帰ることの重要性であった。これらは、三つのテーマにおけるディスカッションすべてに共通していた論点であると同時に、イスラームの教えに基づいて今現在抱えている問題を解決したいと登壇者全員が考えていたからこそ共有できた点であるともいえる。

次に個別のテーマを見ていくと、最も議論が白熱したのはハラール食品とムスリム観光客へのおもてなしについてであった。認証活動に対しては厳しい意見が相次ぎ、ハラールビジネスの現状と弊害についても報告がなされた。また登壇者からは、テロリストというイメージに加え、最近ではハラールというとても厄介な存在としてムスリムがみられつつあると懸念の声もあがった。結論としては、同じ認証であっても商業主義的なものとダアワ(宣教)を目的としたものは区別する必要があること、そして前者の行き過ぎたハラール認証については明確に反対することが登壇者全員の間で共有された。詳しくは「4. 今後の課題と展望」で述べるが、このことについては、現在の国内状況を考慮し、個人の意見で終わらせるのではなく、オーソライズされたものとして一つの見解を日本社会に提示すべきという声があがった。

ムスリム 2 世、3 世に対する教育については、モスク関係者らの現状報告に加え、当日オブザーバーで参加していた 2 世の大学生ムスリムたちから、彼らが実際に直面していたアイデンティティクライシスについて直接話を聞くことができた。彼らに共通していたのは、親以外のムスリムや信仰をもった友人との出会いによってその危機を乗り越えたということである。人間としてのつながりを子供たちがいかに構築するのか、またそのための環境をいかに周りの大人が整えるかということが今後この課題を考えるうえでの鍵となることが示唆された。

地域社会との付き合い方については、各モスクの建設当初から現在までの経験を登壇者たちから聞くことができた。日常生活において地域住民の方々と良好な関係を築くことがいかに大切で、また簡単なことではないのかが明らかになった。具体的な関係構築の方法として、地域行事への参加、駐車やゴミだしなどのマナーの遵守などがあげられたが、それらすべての基礎になることとして、挨拶を含めた人間同士のコミュニケーションの重要性を全員で再確認した。

5. 今後の課題と展望

全国ムスリムミーティングを今回はじめて実施してみて一番の驚きは、本活動への参加者たちからの期待が、予想以上に大きかったことである。日本のイスラーム教徒たちが自分たちの課題について広く議論し協力するためのプラットフォームは、以前から関係者の間で要望があったものの、様々な理由によりこれまで実現してこなかった。そのため、是非今回のような試みを続けていってほしいと、激励と感謝の声を参加者の方々からたくさんいただいた。こうした試みを今回だけで終わりにするのではなく、来年度以降も継続的に実施できるよう、SFC 研究所イスラーム研究・ラボ及び奥田敦研究会の活動の一環として関連する活動を進めていきたい。

また、国内のハラールをめぐる問題については、共同で日本社会に向けてメッセージを発するなど、今回の議論を下敷きに早急にアクションを起こす必要があると登壇者たちから強い要望があった。なんらかの形で再度直接話し合う機会を準備し、具体的なアクションへとつなげていければと思う。

加えて、このミーティングをたたき台として、日本のイスラーム教徒たちの横のつながりを強化するための新しい組織を構築してほしいという声も参加者から寄せられた。ゆるやかなネットワーク型なのか、ヒエラルキー的要素が強い評議会のようなものなのか、形態や名前についてはもう少し検討が必要と思われるが、こちらについても実現に向けて動き出していきたい。

6. 謝辞

本活動の実施に際し、ご協力いただきましたすべての皆様に心より感謝申し上げます。なお、本活動の予算は、2015 年度湘南藤沢学会研究助成基金、その他の研究助成より執行されました。